

## はじめに

富士通では、当社の歴史を残すため、『富士通アーカイブズ』という活動を行っております。この活動の一環として皆様に富士通についてもっと知っていただきたいと考え、隔号で富士通についてのあれこれをご紹介させていただきます。

第九回目は、第8代社長小林大祐の足跡を受け継がれてきた言葉と共にご紹介いたします。

## 1.国内トップメーカーへの躍進を牽引した 第8代社長 小林大祐

1970年代は、ドルショック、2度のオイルショックなど世界経済が激動した時代でした。日本経済は、1973年の第1次オイルショックにより、翌年、戦後初めてのマイナス成長となり高度経済成長が終焉し、高付加価値型産業への転換期を迎えていました。

1976年（昭和51年）、富士通（株）の第8代社長に小林大祐（たいゆう）が就任します。

小林は、富士通信機製造が設立された1935年（昭和10年）に一期生として入社し、富士通がコンピュータを手がけて以来、ほぼ一貫してその陣頭に立って、池田敏雄をはじめとした気鋭の技術者を育成して活躍の場を与え、市場開拓のために自ら営業の第一線に立つなどコンピュータ事業を牽引していきました。そして、社長就任の年に出荷を開始した国際互換機FACOM Mシリーズの成功と日本語での情報処理を可能にした日本語情報システムJEFによって、1979年度コンピュータ売上高で国内トップメーカーとなりました。



第8代社長小林大祐



FACOM Mシリーズ1号機M-190

## 2.ともかくやってみろ

小林が日常の仕事の中で良く使った言葉に、「ともかくやってみろ」があります。

「いろいろやっているうちに問題点が出てくる。その問題に取り組むことが技術のレベルを上げる原動力になることを身をもって体験した。だから、私はよく若い人にこういう。

『おい、ともかくやってみろ。やってみてから文句をいえ。やりもしないで、本を読んだり、人からきいて、そうなりますと分かったようなことをいうな。もし、きみのいうとおりにはできるなら、逆立ちして歩いてやるよ』

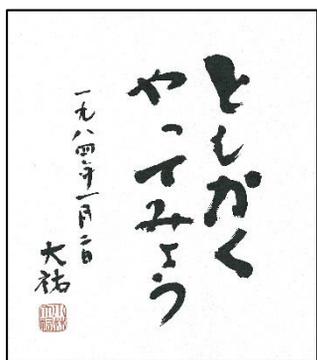
文献に書いてあることは『参考』にはなるが、絶対信用してはいけない。昔、先輩から『本に書いてある公知の事実を、なんでそんなに実験するのか。むだじゃないか』とよくいわれたが、私はやってみて『なるほど』と思わないと、どうも気が済まないのである。

人間というものは、ぎりぎりの状況に置かれないと、あまりいい知恵は出ないものである。机の上でぬくぬくして、環境のいいところでは、かえってひらめきは鈍る。断崖絶壁の上に立って、なんとかここで生きる道を考えようというときに、初めていい知恵がしぼり出されるものだと思う。

だから『とてもこれはできないかな』と思うことでも、ともかくやってみる。その最後のふんばりが他人さまより一歩先に伸びていく力になる。』（「ともかくやってみる」小林大祐著より）

この言葉は、ともすれば、外からの情報に頼ってしまいがちな当時の風潮に警鐘を鳴らしたものでした。自分の頭で考えて、できるまでやってみる粘り強い仕事のやり方が成長の糧であり、富士通をささえてきたと小林は考えていたのです。

小林の想いを感じて、仕事をする上で力をもらったり、何かに迷った時にこの言葉に背中を押される社員も少なくありません。40年以上の時を経ても色褪せない言葉であり、また、インターネットで検索すれば必要な情報にいきあたる現在に、より必要な言葉となっているのかもしれない。



色紙に筆墨した言葉



富士通アーカイブズ展示エリア

### 3. 富士通アーカイブズ展示エリア

弊社沼津工場でも私ども富士通アーカイブズが運営しておりますアーカイブズ展示エリアでは、「ともかくやってみる」やこれまでにご紹介させていただいた弊社に受け継がれてきた歴代経営層の言葉を含めた富士通の歴史に触れていただくことができます。

沼津工場には、歴史施設として、小林とともにコンピュータの発展に寄与した富士通の開発者 池田敏雄を紹介する池田記念室があり、世界最古級の稼働するコンピュータFACOM128Bのデモをご覧ください。また、歴史施設の他にも、Akisai農場やAR見学施設などもありますので、ご見学の機会がございましたら、弊社担当営業までお申しつけください。

『富士通アーカイブズ』の見学をご希望される場合は、営業までお問い合わせください。